

った。

建設作業員の宿舎は建ち、麦は青いうちに刈り倒され、墓地の棺や白骨が掘り出された。町家の人も駆り出され、娘も芸者もモンペ姿で作業に携わる。トラックはもとより、牛馬も動員された。

軍はすべての面で飛行場建設を優先させていた。房総半島は連合軍上陸を予想しているためと、すべてが勝つためであり、負けたら家も命もなくなる。あきらめるより仕方がなかった。地主には土地台帳の実測もされず地積によりわずかばかりの代金が支払われた。

昭和十九年後半から二十年にかけて本土防衛にすべてを投入しなければならぬとき、吉田技師は岐阜飛行師団經理部相模出張所（神奈川県）に勤務を命ぜられ、本土決戦、首都防衛航空基地、厚木航空隊へ出頭した。この一連の土地は、現在も神奈川県北部の米軍航空基地として使用されている所である。

ソ連軍越境参戦

愛知県 外山 浅一

昭和二十年八月九日、私には忘れることのできない日であります。

「ア号工事現場事務所」の一室、前夜九時ころより技術将校某氏らとウィスキー角瓶を空けて酔いつぶれ、そのまま寝込んで仕舞った。夜明けのまだ薄暗いころ、当直将校が大声で非常呼集を叫んで、ソ連軍越境参戦の入電を伝えてきたのです。

そこで早速現場関係者と協議の結果、工事を続行するかまた中止するか、軍經理部より派遣された連絡員である私が、直ちに本部に戻り指示を仰ぐことに決定したのです。

そこで「ア号工事」とはどんな規模のものであったか記憶を辿って説明してみよう。

昭和十九年、敵機B 29の本土空襲がますます激しく

なり、軍需工場の機能が麻痺するのを懸念し、まず飛行機工場を満州に移設する計画が立てられました。

昭和十九年夏、用地が奉天省鉄嶺てつりやうと乱石山らんせきざんの間地点に決定、敷地は航空写真を繋ぎ合わせた図上に、コンパスで円周を画きその中が敷地というわけで、確か直径二〇キロ、三〇キロ、もつとあつたかもしれない。敷地内の山を五十メートル間隔に掘鑿して洞窟を掘り、その洞窟も山の中で碁盤目のようにクロスして、その洞窟内が工場と言うわけである。したがって発動機・板金・プレス組立て等々、工場によつては、洞窟の幅、高さも様々で大変な工事だつたと思います。

こんな現場が第一から第五現場まであり、各現場の資材の状況から、出来高工程など調べて回るのに、トラックで二・三日かかったという記憶がある。現場内に動員されたトラックや人員は数知れない。この工場内には飛行場が二つ建設される予定で、その一つはこの工場を敵機の攻撃から護る防衛の飛行部隊駐屯の飛行場、今一つは月産三〇〇機の飛行機を生産し、その試験飛行する飛行場で、この計画を見ても当時として

は、いかに規模の大きな世紀の大事業であつたか想像できると思います。

行く先々で、時には現役将校と鉢合わせ、弾薬の奪い合いとなり、相手将校より「お前ら何を言うてる今線では大砲・鉄砲を撃つ火薬が無くて困つてる、これから飛行機を造るその工場を作るだなんて呑気な事言うてるな」と脅かされ肝心な爆薬を奪い取られた、と言うようなことも聞いております。

以上「ア号工事」の概略を書きましたが、私の記憶では昭和二十年八月九日現在、この工事も全工程六〇〜七〇パーセントまで進んでいたと思います。「ア号工事」についての説明はこのくらいにして冒頭に戻ります。

ソ連軍越境の入電で、直ちに新京軍経理本部に指示を受けるため戻ることになった私は、直ちに簡単な朝食をすましトラックで鉄嶺の駅まで送ってもらいました。

駅に着いて驚いたことに、満鉄の列車はもう時刻どおりの運行はしておらず、ほとんどの列車が南下する

ものばかり、いくら待っても北上する列車は一本も来ない。早速この列車に飛び乗って鉄嶺を発車しました。かなり長い時間だったと思いますが、車中何を考えていたか当時のことは何も覚えていません。

焦る気持ちでやつと新京駅に着いたのは、もうすっかり日が落ちて午後七時を回っていました。手提げ鞆を小脇に抱え駅前広場にしばし立ち止まりました。

脳裏に走ったのは、責任上真つ直ぐ軍司令部に向かうべきか、また興安大路官舎にいる家族妻子はどうしているかを一目様子を見てから軍司令部に出頭するか、思案にくれました。結果朝から何も食べていない、空腹と気疲れで疲労も甚だしい。

無意識の内に足は駅前広場を右に興安大路に向かっています。内心、列車が乱れているのだから止むを得ないと自ら慰めたのです。真つ暗な夜道を半ば駆け足で官舎に向かう。

官舎に戻って見ると折から空襲警報発令中だったのか、隣近所の官舎すべて真つ暗で、人っ子一人として見当らない。兼ねて準備してあったゴルフ場一角にあ

る防空壕にいたいと思い、暗闇の中手探りで、家族のいる防空壕を見付けました。朝から何も食べていないので、官舎に戻って飯を食べさせてくれ、と頼み家族全員で官舎に戻りました。

窓は遮蔽幕、電球は黒風呂敷で包み、その下で家族揃って夕食を食べました。もし、直撃弾でも受ければ家族全員揃ってのことだから止むを得ない、とそんな事を考えながら食べたことを覚えています。

食事をすませ十一時過ぎ、暗闇の中二キロ近くの慣れた道を軍司令部に向かいました。軍司令部に来て見ると、ほとんどの職員が詰めきりで、各部課ごとに会議が行われている様子でした。一般職員はうろたえて何も手につかず、ただらうろろしているばかりです。

明けて八月十日午前十時ころ、軍司令部全職員家族を緊急疎開するから、簡単な身の回りの品に三日分の食糧を携行、正午までに忠霊塔前広場に集合せよとの命令である。

乗り物は何もない、軍司令部から興安大路の官舎まで駆け足で二、三十分は掛かる。私は取るものも取り

あえず官舎に向かつて走り出しました。道中どの道を通ったか無我夢中で官舎へ駆け付けました。家族は妻と、国民小学校一年生の長男、年子の次男、生後一年四カ月病弱の三男の四人である。簡単な身の回り品を取り纏める傍ら、妻は釜にいっぱいの御飯を仕掛けた。三男は病弱で誕生過ぎてもおしめが必要で、このおしめを大風呂敷に包み、七歳の長男に背負わせたこと、炊き上げた御飯をお結びに握ろうにも熱い御飯がなかなか冷めないのです、集合時間に遅れる、とそのままにして官舎を出たことなど、今なおはっきり覚えていません。

貴重品はじめ最小限に纏めた身の回り品もなかなかの重量となり、妻はその上病弱の子供を背負い、二人の子供の面倒を見るのは大変と案じながら忠霊塔に向かいました。

女子供の歩度は遅い、こんな事では集合の時間に遅れて仕舞う。何か良い方法はないかと思案していた矢先、日ごろかわいがって面倒見てきた地下室のボイラー炊きの満人が、どこから借りて来たのか荷馬車を挽

いて来て、道中子供や荷物を乗せて、送ってくれたときの感激は今も忘れることができません。そのころ、反感を持っていた満人はこの唯ならぬ異変を察知して既にあちらこちらで略奪まで起きていました。

忠霊塔広場には数多くの自動車隊輸送用のトラックが並んでいて、新京駅まで送ることになっていると知り、こんなことなら駅へ真つ直ぐ行った方が近かったのに、と思ったのですが命令だから仕方ありません。私はここで家族と別れ軍司令部へ戻りました。

その夜、上司の許可を得て再び疎開家族援助のため新京駅に向かいました。広い駅前広場は立錐の余地もない。これだけの人をどうして列車に乗せるのか不安でした。やっと見付けた私の家族も人むれで喉が渴き、子供が死を叫ぶ思いで水を欲しがり、見兼ねた私は、ボウフラがいると思われる用水桶の残り水を、空き缶で掬^{すく}って飲ませたことも忘れることができません。汽車と言っても客車ではなく貨物列車で、それも屋根のある貨車すらほとんどなく、大陸で石炭や木材を積む無蓋車ばかり、これだけ大勢の者がどうして乗っ

たか最後まで見届ける余裕もなく、許された時間内に私は軍司令部に引き返した。

八月十一日、経営科上司より関東軍司令部が通化に移駐するという伝達がありました。満州国政府も同時移駐と言うことで、これらの施設をソ連に利用されては不利と、爆破する計画もあり、在京の軍建造物・政府機関・民間の著名建造物等を表示した簡単な見取図を作成した記憶もありますが、事実は撤収でそれどころではなかつたのです。

経理部から九名の残務処理班が編制され、私もその一人に加えられました。特務機関用の備品か新品の中国服一式・帽子から布靴まで支給されました。夜間など必要に応じ着用するためでした。私は経営科国有財産の機密図書焼却処分の責任者として、工兵隊の兵隊百五十名が私の指揮下に配属されたのです。ところがその兵隊のほとんどが朝鮮人です。その上指揮するのが文官の私です。敗戦の色濃いどさくさに私の指揮・命令どころか頼みすら素直に聞いて動いてくれる兵隊は一人もいない。

そこで司令部地下の倉庫をひらき、恩賜の煙草・日本酒二合瓶の箱詰めを見付けたので、これを配っては機嫌をとり作業を進めました。

地下道に配列してあつた鉄庫には、日露戦争のとき接收した建造物から、南満・北満各地にわたり軍が建設したあらゆる建造物が、良質のトレーシングペーパーに整理し納められている。その量は実に膨大なものでした。

その機密図書を担架で運び出し、軍司令部構内に掘られた防空壕で焼却しました。私も兵隊も半裸で、長い棒でつき回すが、良質な紙であり、その上丁寧に製本してあるので、なかなか思うように燃えない。そうかと言って、一枚ずつほぐす暇もなく、朝から燃やし続けた図書が夜になつても燃え尽きない。私も兵隊もそれこそ必死でした。

そのうちに防衛司令部から巡察将校が部下と共に乗馬で飛んで来て、この灯火管制の最中、関東軍司令部の構内で焚き火するとは何事だ、お前たち何を考えとるか、きついきついお灸で平身低頭、早速水をかけ

て火を消したものの、その後処置に困ってしまった。いろいろと思案の揚げ句、司令部構内配置図にて以前から承知していた、古い支那井戸があることに気付く。普段は蓋をかけ、土で覆い地上からは分からないのですが、大体見当はつけていた。

兵隊全員十字鋏で掘り探し、とうとう現場を確認して大歓声を挙げました。かなり深い井戸でこれなら大丈夫と翌朝から担架で何十杯と投げ込みました。深いと思ったこの井戸も投げ込んだ図書が、地上から見えるようになり、もうこれまでと後は土で埋めました。

しかし、まだ図書は残っている。もう一つ井戸があったはずだがその位置が記憶にはつきりしないので、やむを得ず構内に設けられた地下防火用水池を掘り開けて、この中に残りの図書をすべて投げ込み、私の管理する全機密図書の処理を終わりました。

十日午前、家族を官舎から連れ出してから、一度も官舎には戻っていないし、また戻る暇もない。夜、作業を終わると支那服を着て暗闇の中に姿を消しました。ねぐらは空き家となった守備隊兵舎の一隅で暗闇の中、

手探りでベッドの下にもぐって寝ました。

十二日午後、経理部の幹部数人で、日本銀行に相当する満州中央銀行本店に向き軍司令部移設の経費、恐らく軍経理部管理の築造費かもしれないが、とに角地下金庫に保管の現金入り白木箱二・三十箱を持ち出し、私はこの運搬のためのトラックに同行しました。金庫前には機関銃を持った兵隊がいて、やりとりに変だつたと言います。

夕刻、現金箱を積んだトラックに乗り南新京駅に向かいました。ここからの引込線に沿って、被服庫・糧秣庫・建設器材庫などがあり、これら倉庫より必要と思われる、あらゆる物資、資材を満載しいつでも発車できるよう機関車は、煙を吐いて待機していました。

この長く連結した貨物列車を、いつ、どこの部隊が編制し準備したのか、私には分からなかった。私たちが一行はこの列車の途中で準備された貨車に、銀行から持ち出した現金箱を積み込みました。その貨車の半分は既に食料品が満載しており、各種缶詰類・乾パン・菓子・酒・ビールなど、日ごろ目にふれない物まであ

りました。

すべての準備が終わり、この列車は私たち九人を乗せてその夜、南新京を発車しました。運行時間は変則で翌日午後、四平街に到着。四平街に着いてまず驚いたことに何本かある引込線に、疎開者を乗せた貨車がぎっしりと隙間なく詰まっているではありませんか。私たちの列車はここから本線と分かれ通化に向かうので、ポイントの切り換えその他かなり時間がかかるらしい。構内に止められている貨車には新京方面からの疎開家族が満載されている。ひよつとしたら私たちの家族もここに止められているのではないかと、早速一つ一つの貨車をよじ登っては、家族そしてまた知人はいないかと探して回りました。いずれの貨車も老人や、女子供が多く疲れきって言葉を交す元気もない様子です。その上、あいにく小雨が降り出してきたではないか、老人や子供をこの雨から守るため、元気な者は毛布を天幕がわりに広げて、四隅を一人一人支えている。本当に生き地獄を思わせる悲惨な情景でした。

私は一列車を見て回ると、貨車の下をくぐり次の列

車に移りました。確か四列車目のある貨車で、妻の養父を見付けました。養父は年齢も多く酒好きで、体も大変弱っている様子でした。養父は新京東一条通りで四・五人の事務員を使って代書業を営んでいて、景気も大変良かったのです。養父の座っている周辺には、隣組の顔見知りの人が大勢いました。早速私は、自分の貨車に戻り、携帯天幕を広げて、養父の好きな酒瓶・パイ缶・乾パン・菓子など持てるだけの量を、大黒様のように背負い、貨車の下をくぐって、養父の乗っている貨車に戻り、下から大声をかけ貨車内に吊り上げてもらいました。これが養父に対する最後の孝行となったのですが、養父はその後安東で亡くなったと聞いています。

私たちの列車は、その夜半四平街を発車、目的地の通化に着いたのは、八月十五日午前十一時ころでした。到着して間もなく貨車の中で、正午を期し玉音放送があるとのニュースを聞きました。初めてのことでもあり重大な異変を感じたのです。近くに天幕を張った通信隊のラジオが、玉音放送をキャッチして流しました

が、雑音が多くはつきりと聞くことができなかつたのです。

私たち一行はここで終戦の日を迎えたのです。

【解説】

昭和二十年八月八日午後五時、モロトフ外相は佐藤尚武駐ソ日本大使を招き、明九日払暁を期して、日本に対して戦争状態に入ることを通告した。

午前零時、ソ連空軍は一斉にソ満国境を越え満州国深く侵入し、主要都市に爆撃を行った。これと同時に外蒙、まんちゆうり満洲里、黒河、虎頭、綏芬河の五地区から大部隊の攻撃があり、日満軍との間に激闘が交わされた。

当時関東軍は南方戦線に十数万の精銳を転出したため永久要塞を除く国境守備は手薄の状態にあり、甚だしきは木製の偽砲で隠蔽かくぺいするなど弱体化していた。このため一部地域におけるソ連軍進撃は、さながら疾風枯葉を卷く勢いで、たちまちのうちにチチハル、新京（八月十八日）を占領した。また、ハルビンその他の都市には空艇部隊も降下し攻撃を加えてきた。しかし、

永久要塞での戦闘では、日本軍は一步も退かず、日本降伏以後まで激戦を続けた。さすがのソ連戦車群も決死の日本軍陣地を抜くことはできず、これを取り残して進攻した。

ソ連進攻の兆しは昭和二十年六月ころからシベリア鉄道の東行き列車に兵員、武器の輸送が確認されていたのだから、関東軍は国境近くの開拓団、在留法人の疎開、避難を勧告すべきであったが、ソ連を刺激するからとして敢えて勧告しなかつたことが後日悲惨な結果を招き、五十年後の今日でも残留孤児の悲劇が続いている。また日本軍の本質的欠陥として作戦重視、情報軽視が挙げられる。

在欧公館の駐在武官からの情報や国境警備隊の情報がソ連進攻近しを知らせていたにもかかわらず、軍の上層部が無視していた事実が、近年暴露されている。

ソ連側の公式記録によると兵員百五十七万七千七百人、火炮と迫撃砲二万六千門、戦車と自走砲五千五百六十両、軍用機三千四百五十機の編制で進攻。日本軍に対し兵員で一・八倍、戦車で四・八倍、飛行機一・九倍

と優位に立っている。

筆者は明治四十四年生まれ、昭和五年三月、名古屋
高等工業学校建築科卒業後、昭和八年満州に渡り、関
東軍司令部経理部に建設要員として採用され、軍の建
造物の整理に従事した。

昭和十五年陸軍軍属に任命され軍司令部に勤務した。
終戦直後に朝鮮半島に住む日本人の世話をするために
平壤に移ったが、間もなく刑務所に收容された。その
後、延吉（満州）の捕虜收容所に移され、多くの仲間
が飢えと寒さの中で死んでいく生き地獄を体験して昭
和二十二年十月帰国している。